

と 穫 る

Agriculture

人間にとって農業とは何でしょう。

「農 = 生」農業は生命の保全、生活の充足、人生の創造によって人間の「生」を実現します。

いくら科学が発達しても、人間は木の葉一枚作れません。

そんなすばらしい農業が昔から今日まで続いています。

現在の農業

1135戸が耕す1700ヘクタール

「田んぼが見えないところはない！」ような町ですが、いったいどれだけの農地があるのでしょうか。

面積にして1700ヘクタール。町の全面積に対する比率は55パーセント。見た目では8割ぐらいありそうですが、建物、道路、川、山などが占める面積も意外と多いのですね。

この広大な農地で農業を行っている農家は1135戸で、専業農家97戸、第1種兼業農家99戸、第2種兼業農家939戸で、勤めながら農業を行っている家が90パーセント以上を占めています。

また、農業従事者の61パーセントは60歳以上の方で、高齢化が進んでいます。

能登川町の農業に関するデータ

農家戸数	1,135戸(総世帯数の17.5%)
農家人口	5,399人(総人口の23.9%)
農業就業人口	1,311人(総就業人口の11.2%)
耕地面積	1,700ha(全面積の55%)

「1995年農業センサス」より

米を中心に野菜、花の生産も盛ん!

生産額の最も大きいのは米。7540トンで、約24億円の生産額となっています。ちなみに、国民1人あたりの米の年間供給量67.8キログラムで割ると、11万1209人分という、町の人口の約5倍も供給できる量の米が生産されていることとなります。

野菜や花でも同様に、町の消費量の数倍作られているものも多くあります。野菜で生産額の多いのはトマト、かぶ、キャベツです。花では菊、ストレリチアの生産が盛んです。

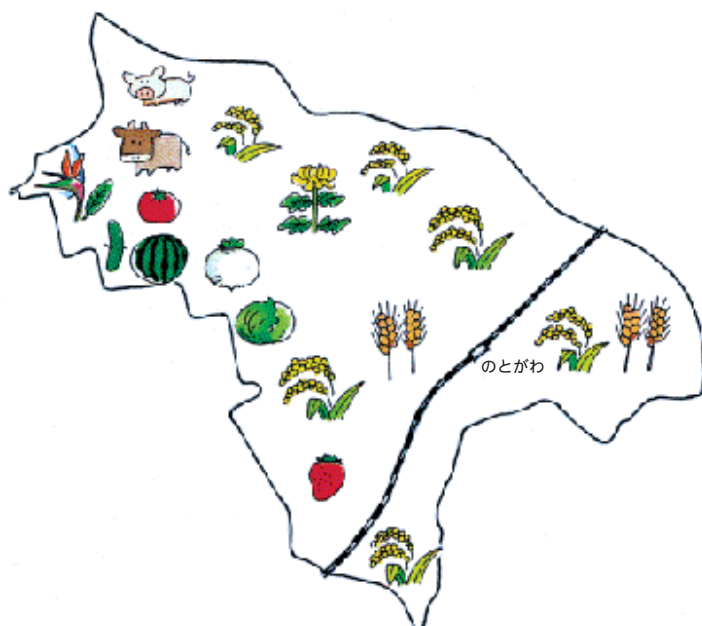
しかし、このような野菜や花の大半は京都や大阪に出荷されており、スーパーマーケットや八百屋さんで見かけるのは、他県産や外国産の食料品がほとんどです。

畜産では、肉牛の肥育が多く、881頭飼われています。



近江大中牛

能登川町農産物マップ



農畜産物ベスト10

- 1位 米
- 2位 肉用牛
- 3位 トマト
- 4位 かぶ
- 5位 キャベツ
- 6位 豚
- 7位 ストレリチア
- 8位 きく
- 9位 小麦
- 10位 きゅうり

農林水産省1995年
生産農業所得統計

機械化された農作業

現在の農業はどのように行われているのでしょうか。一言でいうと機械と農薬の開発で、作業は昔と比べると非常に楽になっています。

水稲の場合で見てみましょう。

春になるとトラクターで耕し、5月のゴールデンウィークになると、申し合わせたかのように一斉に田植えが行われます。田植えが終われば、雑草が生えてこないように除草剤を散布。夏になると農作物に被害をもたらす病害虫の防除はヘリコプターで行われます。秋にはコンバインで収穫して終わり。

農家版の三種の神器ともいえるトラクター、田植機、コンバインは8割から9割の農家が所有しており、どの農家でも同じような作業体系で行っています。



トマトの管理作業



乗用田植機による田植え



キャベツ収穫風景



ヘリコプターによる農薬の空中散布



電照菊



大型コンバインによる収穫作業(小川)



ストレリチア

農業の変遷

新田開発、干拓で増えた農地、いまは減少中

琵琶湖に面するこの町は、江戸時代から戦中、戦後に至るまで新田開発が進められてきました。

栗見新田、栗見出在家は、江戸時代に新田として開発されました。

戦前・戦中から食糧増産のため、内湖の干拓が計画され、小中の湖干拓（きぬがさ、中洲、城東、中央）が昭和21年（1946）に完成しました。続いて、同年から大中の湖干拓の事業が計画され、41年に完成しました。45年に大中の湖干拓地の3分の1が能登川町に編入され、350ヘクタールの農地が増え、耕地面積は最高の1910ヘクタールとなりました。

その後、宅地開発や工場の進出等があり、210ヘクタールの農地が減り、現在は1700ヘクタールとなっています。

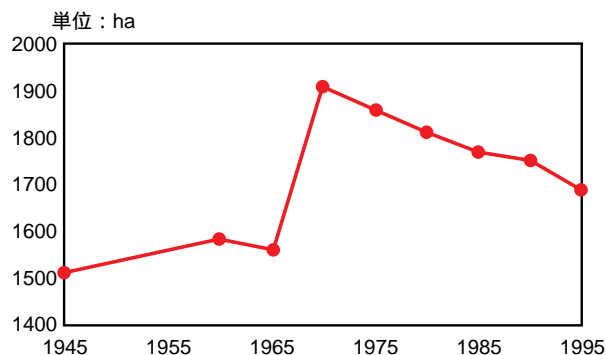
食糧増産の時代は農地を増やそうという国策で、琵琶湖を干拓してまで農地が増えてきましたが、ここ30年間で大中の3分の2にあたる農地がなくなったということになります。

基盤整備で長方形の田んぼに変身！

農業の機械化に対応し、用排水を完備し田んぼの管理がしやすくなるよう、昭和39年から順次ほ場整備が進められています。

30アール区画のほ場に整備されるのがほとんどで、平成7年（1995）度で1240ヘクタールの農地のほ場整備が完了しています。

耕地面積の推移



▲▼基盤整備の前後（上：整備前、下：整備後） 県営ほ場整備事業能登川南部地区（昭和55～63年）

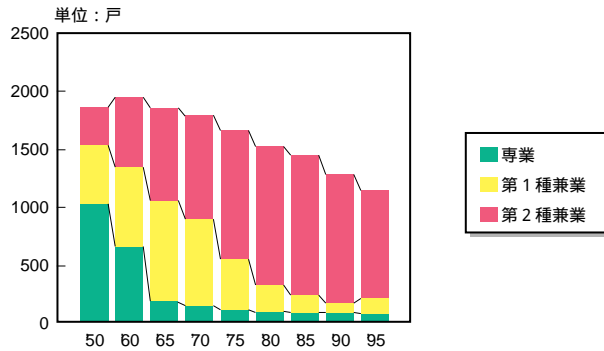


高度成長とともに減少した農家数

1960年代から専業農家、第1種兼業農家が減少し、第2種兼業農家が増加しました。高度経済成長により滋賀県にもあちこちに工場ができ、就業機会が拡大したことが最も大きい要因です。さらに農作業面で農業機械の普及や除草剤等の農薬の開発により、稲作りに必要な労働時間が少なくてすむようになり、時間的余裕が生まれたのも大きく影響しています。

最近の傾向として、専業農家は微増に向いており、離農する人から農地を借りるなどして規模拡大を行っています。安定的な恒常的勤務を主とする第2種兼業農家の変動は少ないのですが、規模の小さい人の離農の割合が増えています。

農家戸数の推移

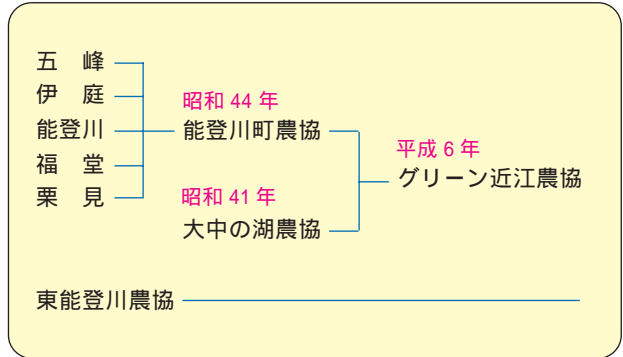


手植えによる田植え作業



東能登川農協

農協の歴史



農業協同組合法が昭和22年に施行されたのに伴い、能登川町では、旧村を中心に、五峰、伊庭、能登川、福堂、栗見、東能登川の6農協ができました。

昭和41年には大中の湖への入植が始まったのと同時に、大中の湖農業協同組合が発足しました。

昭和44年、五峰、伊庭、能登川、福堂、栗見の5農協が合併して、能登川町農業協同組合が発足しました。

その後、3農協の時代が長く続きましたが、農業を取り巻く状況がめまぐるしく変化するのに対応するため、農協組織の拡大が必要となり、平成6年に能登川町農協、大中の湖農協のほか、近江八幡市、八日市市、竜王町、安土町、日野町、五個荘町、永源寺町の9農協が合併して、グリーン近江農業協同組合が発足しました。



JAグリーン近江能登川総合営農センター(旧能登川町農協)



JAグリーン近江大中の湖総合営農センター(旧大中の湖農協)